イザヤ書
イザヤはイスラエル王朝 の後半の時代に
エルサレムに住み神の代弁者として エルサレムとユダの指導者たち
に語りかけていました まず語ったのは神の裁きについて
です 堕落した指導者たちに対して
神との契約を破った報いを受ける と警告しました
偶像礼拝と弱者への抑圧をやめない なら
はじめにアッシリア帝国を通して そして次はバビロン帝国を通して
裁かれるという警告です しかしその警告と共に希望もありました
イザヤは神がいつか契約にある すべての約束を実現してくださる
と 確信していたのです
つまり第二サムエル記 7 章で約束 した通り
ダビデの子孫から王を起こし神 の国を建ててくださり
出エジプト記 19 章のシナイ山で 結ばれた契約を守れるよう
イスラエルを導いてくださるということ です
それはすべて創世記 12 章でアブラハム に約束されたように
神の祝福と救いがすべての国に 広がるためでした
だからこそイザヤは彼の時代の 堕落と偶像礼拝に対して
声を上げずにはいられなかった のです
イザヤ書は複雑な構成をしています が
次のように整理することができます
1 章から 39 章には 3 つの大きなセクション
があり イザヤがイスラエルに対する裁きの
警告をしています それらはすべて 39 章に記されている
エルサレム陥落と バビロン捕囚という結末へ至り
ました しかし 1 章から 39 章には希望のメッセージ
もあり 捕囚のあと神は契約の約束をすべて
実現されるというのです 40 章から 66 章ではその希望の約束
を取り上げています このビデオではまず 1 章から 39 章
までを見ていきましょう
最初のセクションは
イザヤが見たエルサレムの裁き と希望の幻についてです
契約を破り偶像礼拝をし不正を 行う指導者たちをイザヤは非難
し神は他の国々を攻め入らせて イスラエルを征服させることによって
裁くと言います イザヤによればこれはイスラエル
の中の無価値なものを 焼ききよめる炎のようでそれによって

悔い改めて神に立ち返った人々 が住む新しいエルサレムを
作り上げるのですそしてその時 に神の王国が建て上げられ
すべての国の人々がエルサレム の神殿で神の正義を学び
世界中に平和と秩序がもたらされる のです
この様に古いエルサレムが裁き によってきよめられ
新しいエルサレムになるという のが
この書の基本的なストーリーです このストーリーはこの先も繰り返し
語られ 描写は益々詳細になっていきます
このセクションの中心で イザヤは神が神殿の中で王座について
おられるという 壮大な幻を見ますその周りでは
セラフィムという御使いが聖なる 聖なる聖なるかなと叫んでいました
その時イザヤは不意に自分を含 めたイスラエル人が
どれほど堕落しているかに気づき ました
そして神のきよさによって自分 は滅んでしまうと思ったのですが
そうはなりませんでした 神のきよさは燃える炭となって
彼を焼きましたが 滅ぼしはしませんでしたむしろ
彼を罪からきよめられたのです イザヤがこの不思議な体験について
考え込んでいると 神は非常に難しい任務を与えました
やがて来る裁きについて語り続け よというのです
しかしイスラエルの反逆は度を 越しており
彼らは警告を聞けば聞くほど頑 なになるとも言われました
イザヤはそれでも神の計画を信じ 続けなければいけません
イスラエルはやがて木のように 切り倒され切り株だけが残ります
そして切り株は焼かれてしまいます がこのくすぶる切り株が
未来につながる聖なる種になる というのです
ここにかすかな希望があります が
聖なる種とは一体何を指すのでしょうか 最後のセクションにその答えがあります
イザヤはダビデの子孫であるエルサレム の王アハズを糾弾し
彼の破滅を宣言しました 神は最初にイスラエルを倒し
荒れ果てさせるのはアッシリア 帝国だと言いましたが
そこには希望もあるのです ダビデへの約束に基づいて神は
エルサレム陥落のあとに インマヌエルという新しい王を
送ろうとしていました これは神は私たちと共にいるという
意味です インマヌエルの王国は神の民を
凶悪な帝国から解放します

イザヤはこの来るべき王を
ダビデの家系の古い切り株から 生え出る小さな新芽と表現しました
これが 6 章で言われた聖なる種なの です
この王が神の霊によって強められ 貧しい人を救う正義を新しいエルサレム
にもたらします すべての国々もこのメシアの王国
に導きを求めるでしょう 神の王国はすべての被造物に平和
をもたらすのです ここまで読むとイザヤの裁きと
希望のメッセージがよく伝わり ますではこれはいつ起こるのでしょうか
イザヤはアッシリアのあとにバビロン 帝国が現れると告げました
バビロンもエルサレムを攻撃し ついに壊滅させます
ここからが次のセクションです まず国々に対する神の裁きと希望
に関するたくさんの詩があります 最初はバビロンとイスラエルの
近隣諸国の没落についてです イザヤは大国アッシリアの地位
がやがて さらに破壊的で誇り高ぶった
バビロンにとって代えられると 言いましたバビロンの王は
自分たちは他の神々を超える存在 だと言ってのけます
そこで神はバビロンを滅ぼすと 誓われますが
これはバビロンに限ったことではありません イザヤはイスラエルの近隣諸国の
名を挙げながらその傲慢と不正 を糾弾し彼らの破滅を預言します
しかしすでに述べたようにイザ ヤにとって
神の裁きはイスラエルや他の国々 への最終宣告ではないのです

それが 次のセクションにある 2 つの街について
の詩につながっていきます 非常に繁栄し自らを神より高い
ものとした挙句 堕落と不正にまみれた街があります
この街は反抗的な人類の典型で イザヤがエルサレムアッシリア
バビロンについて先に述べたことを 全部合わせたようなあり様でした
この街には必ず滅びの日が来て 王なる神が治める新しいエルサレム
が代わりに訪れます そこにはすべての国から贖いだ
された人々が住み 苦しみも死もありません
これらの章がこのセクションの クライマックスです
またこの箇所は イザヤが時を超えたメッセージ
を語っていたことを示します これは暴力と抑圧のはびこる国々
に神が正義をもたらし 義と平和と癒しと愛に満ちた神
ご自身の王国を建ててくださる ことを
待ち望む人々へのメッセージです

次のセクションは再びエルサレム
の栄枯盛衰に焦点を当てています まず一連の詩の中でイザヤは
アッシリアから守ってもらうために エジプトを頼りにした
エルサレムの指導者たちを非難 しています
その期待は必ず裏切られるから です
イザヤはただ神に信頼し 悔い改めることだけがイスラエル
を救うと語ります このメッセージは次に続くエルサレム
の王ヒゼキヤの話でも 語られます
イザヤが預言した通りアッシリア が攻めてきた時
ヒゼキヤは神の前にへりくだって 祈り助けを求めました
すると奇跡的に街は一夜にして 危機を脱したのです
ところがこのあとすぐヒゼキヤ は失敗してしまいます
バビロンからの使節団をもてな そうとしたヒゼキヤは
相手の関心を買おうとしてエルサレム の宝庫神殿
宮殿のすべてを見せたのです これは防衛上の政策として同盟
を結ぼうとしたためでした これを聞いたイザヤはヒゼキヤ
の愚かさをなじり その同盟はいつかエルサレム征服
と言う形で 彼を裏切るだろうと予告しました
それが正しかったことは 第二列王記の 24 章 25 章で明らかになっています
約百年後にバビロンはエルサレム に牙をむき街と神殿を破壊し人々
を捕囚として引いて行ったのです 1 章から 39 章にある神の裁きについて
のイザヤの警告が すべてここにつながっています
イザヤが言ったことはすべて現実 になり
彼が真の預言者であることが明 白になりました
しかし神の裁きはエルサレムを きよめ
聖なる種とメシアの王国をすべて の国にもたらすためでした
次の回ではその希望について見て いきましょう
これがイザヤ書 1 章から 39 章です

500 字要約

イザヤ書はイスラエル王朝後半の時代にエルサレムに住んだ神の代弁者、イザヤが神の裁きと希望について語った書です。彼は堕落した指導者たちに神の警告を伝え、アッシリアやバビロンを通じて裁きがくると語りました。しかし、神は約束を実現し、ダビデの子孫から王を起こし、神の国を建てると信じられていました。イザヤ書は複雑な構成を持ち、39 章までは裁きの警告と共に希望のメッセージも伝えています。後半の章ではバビロンの滅亡や新しいエルサレムの到来、メシアの王国について語られます。イザヤの言葉は時を超えたメッセージで、神の正義や平和を待ち望む人々に希望を与える内容です。